

## 街路樹

## 学力向上に向けて 29

## ～高校入試に思うこと～

県立高校の入試も間近に迫ってきました。ここからが、正念場。三学年担当の先生にとって、進路事務を進めながら、学習指導に一際、熱が入るところです。運動にたとえると受験は、個人競技に思われますが、「受験というのは『団体競技』です。」と京都市立堀川高等学校長荒瀬克己氏は、書かれていました。「奇跡と呼ばれた学校」。その通りだと実感します。学級全体で乗り切ろうと担任の先生と子どもたちが合格目指し強い思いを抱いてがんばっている。それが、今の時期の教室の風景だと思います。

さて、入試が終わって、問題を見ると毎年思いを新たにすることがあります。「自分の指導は、ここが足りなかった」「入試問題に対応できる力をつけるために、次年度はこんな指導をしよう」と思うのです。入試は、日頃の指導を振り返るよい機会でもあります。

そこで、過去五年分の国語の問題を見てみましょう。漢字の問題に限れば、毎年、書き取り四問、読み取り四問の合計八問が出題されています。書き取り、読み取りとも一字の訓読みの漢字が二問、二字の熟語が二問ずつです。

書き取りでは、出題された二十問の漢字全てが、小学校で学習した漢字でした。ただし、「朗らか、訪れ、費やす」は初出は小学校ですが、出題された訓読みは中学校で学習しています。

読み取りは、中学校で学習する漢字が九問。小学校が四問。小、中それぞれで学んだ漢字の組み合わせの熟語が七問でした。ただし、一字の漢字では、十問中、九問が中学校で学習する訓読みでした。

つまり、漢字に限って言えば、小学校で学習した漢字は、全て書けること。中学校で学習した漢字は、全て読めることが必要だと言えます。

ところで、漢字の習得には、根気強い取り組みが欠かせません。単調な漢字習得に興味を持って取り組ませる指導の工夫が求められます。例えば、音・訓読みの確認、漢字の書き順、そして練習をセットにして毎時間行う。漢字の豆テストと家庭学習を関連させて行う等。特に、目新しい方法ではありませんが、継続することが鍵です。そして、学びの基本となる文字の習得をしているという安堵感が教室を覆い、落ち着いた学習空間を作るという効果も期待できます。義務教育九年間の総まとめの時期。小学校の指導のバトンをつないで中学校へ。そして、高校へ。学びをつなぐ三学期です。

## 「教育評価講座」講義より

## ◇評価を生かした授業づくりのポイント◇ ～現状の評価から～

— 早稲田大学教育・総合科学学術院 安彦忠彦 特任教授 —

**1 言語活動の充実**:各教科等での言語活動(記録、説明、論述、討論など)の重視、書かせる表現活動を学校の教育活動全体で工夫する(活用型学習＝活用力・表現力の育成)、コミュニケーションや感性・情緒基盤としての言語活動重視、**時数増活用**

**2 理数教育の充実**:小中の円滑な接続を踏まえた内容の系統性の充実(算数・数学で必要なラセン反復学習の具体的計画＝時数増活用)、実生活に結びついた学習(科学的リテラシー)＝「わかる」「楽しい」「役に立つ」理数教育、**時数増活用**

**3 体験活動の充実**:社会性・人間性・知性の基礎に**時数増活用**、発達段階に対応した体験活動の拡大・強化＝集団宿泊活動や自然体験活動(小学校)、職場体験活動の拡張(中学校)

## 授業改善・指導技術 19

## ～授業評価～

○授業評価とは、よい授業か、よくない授業か値ぶみをするものである。研究発表会や授業研究会での研究協議、指導助言等は授業評価である。「導入は、具体物をうまく使っていてよかった」「個人→小集団→個人→斉という学習形態はよかったが、小集団にもう少し時間がほしかった」というように、授業技術や授業形態について、よかった点、反省点が指摘される。これにより、指導技術等の改善が進み、授業がよくなっていることは確かである。

○しかし、肝心なことが欠けている。それは、すべての授業には実現すべき目標があり、協議の中心は、「すべての児童生徒に目標は実現したのか」「目標の実現が不十分な児童生徒は、この後どのように指導するのか」でなければならないのに、そのような発言は皆無なのである。

○評価の観点から、よい授業とは、すべての児童生徒が、目標を実現できる授業である。そのためには、目標を、指導の仕方、測定の仕方がわかる水準まで具体化することである。実現状況を途中でチェックし、状況に応じた指導で、すべての児童生徒に目標を実現して終わる授業をぜひしてほしい。

— 石田恒好 文教大学園長 (悠+ 2009.9)より引用 —

## 学級経営のヒント 18

## ～言語能力を伸ばす環境～

新学習指導要領では、言語力の育成を重視している。言語能力を伸ばすには、学習にふさわしい環境、適度な学習刺激を与える言語環境が望まれる。

- ① 豊かな言語を習得するには、優れた図書に親しむことが最も効果的です。読書活動のより活発な取り組みが重要です。
- ② 「話す・聞く」活動は、計画的な指導が必要です。掲示資料等の日常的な活用を継続しよう。(話型のポイントなど)
- ③ 話し言葉の基礎・基本を身につけさせるために、教師は子どもの手本になる言葉を使うよう心がけたい。
- ④ 伝統・文化や季節の言葉に触れる環境の整備と、和の心をはぐくむ取り組みをすすめる。
- ⑤ 子どもの作品寸評などにも、誤字がないようにする。また、子どもの作品や広報資料などの誤字・脱字にも気を配る。
- ⑥ 掲示資料のポイントは、**適時性、創意・工夫、表現の適切さ、新鮮さを追求したい。**

- 4 伝統や文化に関する教育の充実
- 5 道徳教育の充実
- 6 小学校段階における外国語活動
- 7 社会の変化への対応の観点から、教科等を横断して改善すべき事項(学校・学年で重点化して実施):情報教育、環境教育、ものづくり、キャリア教育、食育、安全教育、心身の成長発達への理解

各学校では、平成22年度教育課程編成を進められていることと思います。1/18の「評価を生かした新学習指導要領の授業づくり」の講演では、中教審委員を務められたことも踏まえながら、特に、「活用型」学習の重視と時数増の活用について、お話いただきました。教育課程編成に生かしていただければ幸いです。